

福永武彦「遠方のパトス」論

—生と死のあいだ—

飯 島 洋

I

「遠方のパトス」（『近代文学』一九五三・一）は、『冥府』初版（大日本雄弁会講談社 一九五四・八）に付された「ノオト」によれば、「作者として書きたくてならなかつた題材」であるとされ、「冥府」（『群像』一九五四・四、七）などとともに「この作品集のどれもが、死を主題としてゐることに僕はようやく気附いた」という。二章からなるこの作品の「1」では、戦後、湖畔に立つ高等学校の寮で卒業論文や翻訳のアルバイトをして過ごす沢一馬の、戦中に自殺した吉住をめぐる回想や、かつて二人が愛し、今はアメリカに渡航しようとする弥生への感情が描かれる。「2」は本文のすべてが弥生の内的独白で占められ、吉住のひたむきな求愛や、それに応えようとしなかった自己の生のことが述懐される。

沢一馬も弥生も、愛情やそれがもたらす生の動揺から距離を置こうとする姿勢がはっきりとうかがえる。弥生は出帆を前に沢に対して別れの茶会に誘う手紙を送るものの、沢は「もし行けば、取り返しをつかない程に僕の心は燃え上がるだらう。遠くからただ愛してゐればいいのだ」として会いに行かない。さらに「愛することは浪費だ。自分のものを与へることだ。僕達にはもう与へるものなんかありはしない」とまで考える。一方の弥生も、吉住の愛情の告白を回想して「私もあの人を愛してゐた、しかし、しかし愛したからつてどうなるのでせう、とわたしは言つた」という。

とはいえ、沢一馬は、生きることそのものの価値までも否定しているわけ

ではない。沢は吉住や戦友たちのように自分が死ななかつたことについて「生きてあるといふことはいいことだ」と思っている。弥生もまたこれからのアメリカ生活について「ピアノの厳しいレッスンの中で何も考へず何も考へず暮す」「過去はみんな忘れてしまはう」と意思している。「何のため？」と自問し、「この冷たい乾からびた心を埋めてしまはう」というように、未来に対する積極的な態度には欠けるとはいえようが。

このように、確かに共通の知人の死が二人の主要人物の生に影響しているとはいえ、一見すると彼らの物語が「死を主題としてゐる」ということはそれほど自明ではない。

本稿ではこうした彼らの、愛情に没入することへの否定的姿勢がもつ意味を考えてみたい。

II

吉住は沢に対し「僕たちには苦しむことが多すぎる。あの人にもそれが分るだらう。しかしただ見てゐるだけだ。自分では決して飛び込もうとしない。苦しみの外側にゐるだけだ」と言っている。弥生の独白によれば吉住は「僕は戦争といふこの大きな悪に加はりたくはない」と語っており、当時の時代状況において、戦争という悪への加担が避けがたいこと、つまり自己の意志によって自分の生を律することが困難であることが彼に苦悩をもたらしていたことがわかる。

弥生の側は、吉住の生前、沢に「私は愛されるのが怖くてしかたがない」と言う。その理由は直接語られないが、吉住について「わたしもあの人を愛してみた」にもかかわらず、彼から「烈しく心の底を打明け」られた時のことを、「わたしはあの時に困つたと思つてゐたのだ」と振り返りつつ、吉住が「疼くやうな心の痛みを訴へ」るのに対して「心の痛みは直にわたしをも捕へてしまつた」としている。ここからは、他者との愛情関係にかかわることは、愛の問題に「捕へ」られることだという弥生の認識を読み取れよう。愛すること自体は彼女の心性にも宿っている。しかしそれが愛を打明けたり打明け

られたりという働きかけになることを彼女は恐れる。このような働きかけに身を投じることによって生は展開するはずだが、彼女は初めからそのような生のあり方に対して距離を置いてしまっている。

沢一馬も、愛されることへの怖れを告白された際、「この人は僕が愛してゐることを知つてゐるのだらうか」と考えている。このことは、戦時中の破局体験以前から、彼もまた愛情を抱きながらそれを相手に打明けて他者との関係を築こうとする姿勢を持っていないことを示している。

宮蔦公夫は「愛する気持ちを剥奪された人間」を描いていると考えられる¹としているが、弥生の場合、戦時の動揺や吉住の自殺という外的要因によって愛する気持ちを喪失したわけではなく、それ等の事件以前から、愛に対して距離を置こうとしているといえよう。「福永の主題は沢と弥生の心の中で引き起こされた人間を変えてしまうような葛藤そのものを描くことではないようである」と宮蔦は示唆しているが、そもそも何らかの事件をとおして生の構造を根本的に転換するような「葛藤」などは起きていない。沢も弥生も、自分の生の構造を改めて戦後確認し、その生を継続する意思を示しているに過ぎないといえる。

このように、愛情に基づいた他者との関係から身を引き、自らの孤独を守ろうとする姿勢は、「遠方のパトス」に限らず福永武彦の他の作品にもしばしばみられる。たとえば旧制高等学校時代の下級生への愛と、社会人となってからの女性への愛の双方に挫折し、サナトリウムで自殺とも思われる無謀な手術を選択して死を遂げる青年の生を描いた『草の花』（新潮社 一九五四・四）において、主人公・汐見茂思は敢えて孤独な生を選択する。

信仰をめぐる汐見は互いに思いを寄せていた藤木千枝子と議論になる。千枝子が「信仰といふものは悦びだ」と考え、同信の者同士が「霊的な」「愛の交り」を結ぶのを自然なことと主張するのに対して、汐見は自分の思想を「無教会主義の考へかたよりもつと無教會的な考へかた」といい、普通には「孤独といふのは弱いこと、人間の無力、人間の悲惨を示すもの」であるが「僕はそれを靱いもの、僕自身を支える最後の砦」と考えるという。「孤独な状態は惨めだ」とは認めるが、人間が連帯し組織となったとしても、「この戦争」

を阻止する可能性は日本に残されていない。「だからせめて、自分のちつぽけな孤独だけは何よりも大事にしたい」のである。

軽井沢の「人気のない高原の原始林」で、汐見は千枝子と「固く抱き合って、頹れるやうにその場に倒れ」る。自身に「最後の意志と決断とがあれば」すべてが可能な瞬間であった。しかし、「何かが僕をためらはせた」と汐見は回想する。「僕の内部にある恐怖、一種の精神的な死の観念からの、漠然とした逃避のやうなもの」を感じ、自分の腕の中にある千枝子が「僕の内部への闖入者」のように感じられたという。

教会の否定も、女性の肉体への没入への躊躇も、自己の存在が他者によって浸食されることを峻拒する心のありようを示しているといえる。

この孤独への意志ともいうべき心性は、単なる孤独癖とは異なる。教会の俗物性を手厳しく批判していることから、汐見の心性はピューリタンの純潔を基盤として成り立っているようにもみえる。ただ彼は自分が「容易に千枝子に会ひに行かない」ことについて、愛を「隔離された時間に確かめることほど、僕に愛といふものの本質を教へるものはない」とし、「愛が持続であり、魂の状態であり、絶えざる現存であり、忘却への抗いである以上、会ふとか、見るとか、話すとかいふことは、畢竟単なる現象にすぎない」と記している。汐見にとって愛は自分の存在のあり方の本質をなしており、それが生活の「現象」によって揺るがされることを峻拒していると考えられる。

沢や弥生が持つ愛への距離感は、こうした自我の純潔への執着を内包しているだろうか。「戦争に行つて人を殺すより自分を殺す方がいい」と考えて自殺した吉住を友人が「臆病だったのだ」と批判するのに対して、沢は「僕たちのほうが臆病だった」と反論する。自己の思想を命を賭して守ることができず、現実の論理に屈従してしまったことを認めているのである。そのうえで彼は「現実といふものは繰返した。(略)おびやかされる平和。結局はまた繰返すのだ」といい、生が現実の論理の前に常に繰り込まれざるを得ないと認識している。にもかかわらず沢は「生きてゐるといふことはいいことだ」と考える。

では沢にとっての生の価値は奈辺にあるのか。彼は戦争を体験した自分た

ちにとって「愛することなんか出来ない」と思う。「もし愛してゐることでせめて一杯の水でもあの時手に入ったのなら。それならば愛しましょう。愛からは一杯の水も生まれてこない」ともいう。つまり、愛が生きるにあたっての現実の必要性に答ええないことを指摘している。また、想像上の弥生との対話の中では、愛することについて「自我と自我とが衝突して、最後には厭な思ひをするだけ」「遠くにゐれば、恋人はただ美しい」といい、これからの人生について愛することも愛されることもなく雑誌社あたりに勤めながら「自分のための詩」を書くことを予想する。詩については沢は弥生に以前「僕はただ自分のためにだけ詩を書いてゐる」と告白していた。

沢にとっての生の価値とは、死の不安を免れて現実の生存を無事に送り、他者との関係に傷つくことを避け、文学の世界においてのみ、自我を充足させることであるといえる。死、あるいは精神的な死を齎しかねない事態から逃れ、静寂のうちに生を全うすることを沢は志向しているのである。

III

ここからは弥生の心性の考察に入る。彼女の内面にもまた吉住の死が大きな位置を占めており、吉住のように「あんなにひたむきに生きあんなにひたむきに死ぬことが出来たら」と思いながらも「わたしは冷たい心をしか持つてゐなかつた」と振り返る。作品の最後にも「私の心は冷たい」と繰り返す。「ひたむきに生き」る姿勢から弥生が遠かつたということは、当然彼女が生から距離を置いていることを意味する。しかし「ひたむきに死ぬ」こともしなかつたことは、必ずしも死からも距離を置いたことにはならない。ひたむきな死は、「火のやうに燃え」「自らを燃し盡した」吉住の劇的な生の結果であり、その生を全うできない絶望ゆえの自殺であつて、単純な死への志向ではない。弥生が沢と同じように死から離れて静かな生を望んだと即決することはできない。

さて、弥生の独白（その中に引用される吉住の言葉も含む）には、繰り返し発せられるキーワードともいふべき語がいくつかある。

一つは「太陽」である。吉住が自死直前に弥生に書き送った書簡の一節「山上湖はもう冬枯れで湖がうそ寒い太陽を浮かべてゐます。明日も、太陽がこの湖の上に浮かぶでせう」を弥生は想起し²、「吉住さんの死んだところ、ここでは秋の太陽が湖の上に白く浮かんでゐるだらう、遠くへ行つてしまはう、みんな忘れて、空しく生きて行かう」と述懐する。末尾にも彼女は「山上湖では毎日太陽が湖の上に白い光を投げてゐるだらう」と繰り返す。「太陽」が「白い」光を投げかける湖では、吉住が永遠の眠りに就いている。この死の記憶に染められた湖というトポスから「遠く」離れようとしている、と弥生のアメリカ行きを捉えるならば、弥生は確かに死から逃れて生きていこうとしているといえる。

しかし、弥生はこのようにも考えている。

わたしは遠くへ行く、アメリカへ、どこでもいいどこか遠くへ、この記憶から逃れて遠くへ、しかし死と生ほど遠く離れてゐるものはない、死と生との間にも愛といふものは続くのだらうか。

これを読むと、弥生にとって重要なのはアメリカで音楽を学ぶことより、とにかく「遠くへ」行くことであることがうかがえる。「わたしはアメリカへ行く、何のため？ピアノ？」という自問からも、音楽に積極的に生を投げ出して行こうという姿勢は読み取りがたい。どこから遠くへ離れようというのかという点が作品解釈において重要になる。

この弥生の述懐は、ボードレールに触れた者であれば容易に散文詩集『パリの憂愁』の「この世の外ならどこでも」ANYWHERE OUT OF THE WORLDを想起するであろう。語り手は自分の魂に対し、居場所を変えたいという欲望を満たすべくさまざまな提案をする。そして移るべき地はヨーロッパから北方へと向かう。

もっと遠くへ行こう、バルト海の最果てへ、可能なら生からさらに離れよう、北極に身を据えよう。そこでは太陽は地面すれすれを掠めるだけ

で、光と夜の緩慢な交替が多様性を消し去り単調さを増す、
 Allons plus loin encore, à l'extrême bout de la Baltique ; encore plus loin de la
 vie, si c'est possible ; installons-nous au pôle. Là le soleil ne frise
 qu'obliquement la terre, et les lentes alternatives de la lumière et de la nuit
 suppriment la variété et augmentent la monotonie

北方志向と死が結びついていること、そして福永の『死の島』にそれが投影していることは、岩津航が検証している³。また、福永の短編「世界の終り」(「文学界」一九五九・四)においても、外部世界に適応できない主人公の根源的な死への志向性が、北方幻想として表象されていることを拙稿で指摘した⁴。岩津論でも引かれるこの詩でも、志向される土地は北方へと「遠く」離れてゆき、ついには「死のアナロジー」である極北の地が提案されている。

弥生は生よりもむしろ死(身体的な死ではなくメタファーとしての)を志向しているのではないだろうか。弥生を悩ます吉住の記憶は、死そのものよりもむしろ苛烈な生に彩られている。「あの人は火のやうに燃えた、そして自らを燃し盡した、愛するといふのはさういふこと、わたしは自らを燃さなかつた」と彼女は考えている。吉住は自己の生を燃焼しつくし、自分は自己を生に向けて投げ出していないとの認識がある。「この記憶から逃れて、遠くへ」行くと弥生はいうが、「しかし死と生とほど遠く離れてあるものはない」と独白は続く。「しかし」という逆接で結ばれていることは、どんなにこの記憶から遠くへ行き、弥生が生から離れようとしても、結局実体的な死に近づくことは出来ないという認識を含意している。

では、「白い太陽」は生を象徴するものかという、そう単純に断定することはできない。既に引用したように吉住は山上湖に浮かぶ太陽を「うそ寒い」と形容している。彼や弥生にとっての「白い太陽」には熱がないのである。これも岩津が指摘しているように、ボードレールの「深淵ヨリ叫ビヌ」DE PROFUNDIS CLAMAVI には熱のない氷のような太陽 Un soleil sans chaleur、La froide cruauté de ce soleil de glace が出現し、生の躍動から見放された世界が表象されている。「幻想的な版画」UNE GRAVURE FANTASTIQUE にはより

直接的に、白い太陽のもとに埋葬された死者たちが描かれる。

広大で冷たい果てしのない墓場、そこには白く色褪せた太陽の微光のもと、古代と現代の人間たちが埋れている。

Le cimetière immense et froid, sans horizon,/Où gisent, aux lueurs d'un soleil blanc et terne,/Les peuples de l'histoire ancienne et moderne.

とすればやはり、弥生が逃れようとする磁場は苛烈な生の記憶と共に永遠の死、死者の記憶に染め上げられた場でもある。彼女は死の記憶から逃れようとしながら同時に死を志向していることになる。この矛盾はいったい何を意味するであろうか。

IV

人物がある世界から逃れようとして脱出を図るが、結局のところ同様の世界をしか見出さないという構図は、『ボードレールの世界』（矢代書店 一九四七・一〇）で福永が既にボードレールの本質として指摘している。

僕たちが一つの生を生きる限り、与へられた時間を逃れることは遂に出来ない。僕たちに出来るのは、ただこの時間の中に別の時間を持つことだけだ。そして別の時間を持つとは、与へられた時間を忘れることに他ならないだらう。

（「4 旅」）

人は「一つの生」を強いられており、たとえそこから脱出しようとしても、その生の構造から逸脱することはない。死を内包した生という苦い経験を経た弥生は、意識的であるか否かを問わず、その場から逃れようとしても死を自己から切りはなすことはできない。

ボードレールの「シテールへの旅」UN VOYAGE À CYTHÈREにも同様の

構造を見出すことができる。鳥が飛びまわるような明るい気もちで、甘美な神話に彩られたシテール島へと脱出した私は、悲しげな黒々とした島 *île triste et noire* がそれであると知る。近づいてゆくと三本枝の絞首台が、死の象徴である糸杉のように、空を背に黒く浮き上がっている *un gibet à trois branches/ Du ciel se détachant en noir, comme un cyprès* のを目にする。そして私の姿が吊り下がっている象徴的な絞首台 *un gibet symbolique où pendait mon image* を見出す。

今、ここから脱出するが、結局その先にあるものは自分がそこから逃れ否定しようとしたものに他ならないのである。福永はボードレールの詩編「冥府」*Les Limbes* について、「憂愁に包まれた精神的風景を歌つてゐる」としたうえで、その作品世界が「死の思ひが（死そのものではない）、倦怠に充ちた詩人の生に射す幽な光である」として次のように述べる。

冥府こそは、ボオドレエルの苦しい内面の旅の、出発点であつたと共に最後にまた彼の戻つて行つた故郷に他ならなかつた。

（「1 詩集」）

死は生と対立するものとしてあるのではなく、生の根源に、生の原点として存在に根差しているとされるのである。

戦争の惨禍や愛の悲劇といった体験を経る以前から、既に弥生は男女の愛がもたらす動揺から距離をとろうとしていた。戦後、自分がその求愛に応えることのなかった吉住の死の記憶から逃れ、すべてを忘却しようとしてアメリカ行きを決意する。そのどちらの行為にも、人間の根底にある死に支配された心性があるといえるのではないだろうか。沢と弥生は、どちらも動揺から身を避けようとする点で表層は類似しているが、前者が静かな生を志向するのに対して、後者は死を志向している、より精確に言えば沢と同じように死から逃れて静かな生を確保しようとしながら、根源的にはその生は死によって支配されているのである。弥生はそれを言語化して意識しはしないものの、世界を死に囚われているものと捉え、忘却の中で仮初の生を営もうと決

意しているのである。

¹ 「「遠方のパトス」小考」（「イミタチオ」一一号 一九八九）

² 山上湖のモデルは山中湖である。山中湖の同時代状況とそれが山上湖に仮構されたことの意味について、山中基成が「山上湖／山中湖—福永武彦『遠方のパトス』について」（「立教大学日本文学」八四号 二〇〇〇）で論じている。

³ 「北方の島と白い太陽——福永武彦『死の島』とボードレール」（「金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇」二号 二〇一〇）

⁴ 「福永武彦「世界の終り」論——「現代の悲劇性」への眼差し」（「日本近代文学」九四号 二〇一六）

キーワード ボードレール 北方 冥府